

はじめに

認知リハビリテーション研究会は1995年5月に第1回の研究会を開催し、本年11月で第10回となりました。当初は30～40人で訓練症例を持ち寄って意見を交換する懇話会的なものを考えておりましたが、うれしい誤算ではじめから80人を上まわる参加がありました。研究会を重ねるにつれさらに多くの方々が参加されるようになり、また貴重な症例の報告も重ねられてきました。そのため昨年より、会員制とし、半日づつ年2回行っていた研究会を、年1回、午前午後を使って演題発表の他、教育セミナーやラウンドテーブル・ディスカッションなども含む形といたしました。現在、会員は230名程になっています。

本研究会の機関誌的なものとしてムック形式の「認知リハビリテーション」を年1冊刊行していくことになりました。その第1号が本書「認知リハビリテーション2000」です。会員の方には事務局よりお届けいたしますが、店頭で一般書籍としても販売されることとなります。

「認知リハビリテーション2000」では、第9回認知リハビリテーション研究会の発表演題のプロシーディング、および第1回から第8回までの発表演題名と発表者の一覧を掲載いたしました。また、東京医科歯科大学顎顔面生理学の入来篤史先生には“サルの道具使用を手掛かりに「知性の神経生物学」に挑む”というきわめて興味深い特別寄稿をいただきました。大東祥孝先生、池田学先生、福澤一吉先生にはそれぞれ大変に読み応えある総説をお寄せいただきました。大東先生の“「同時失認」をどう捉えるか”では、「同時失認」概念の再検討と臨床類型の提案がなされ、池田先生の“前方型痴呆のケア、リハビリテーション、薬物療法”では、作業療法を中心としたケアやリハビリテーションの要点、言語療法の可能性、薬物療法の概略が述べられています。福澤先生の“神経心理学的症状を理論的に捉えるということ”では、神経心理学における症状の理論的理解の重要性とそれに基づく訓練プログラムの必要性が指摘されています。

認知リハビリテーション研究会は、形としては学会のようになりましたが、これからも堅苦しくならず、気楽で自由な意見交換の場という本来の雰囲気を失うことのないよう、続けていきたいと考えております。また「認知リハビリテーション」への活発なご投稿をお願いいたします。

本研究会の事務局はこれまでどおり東京都リハビリテーション病院にありますので、お問い合わせなどありましたら、ご連絡下さい。

平成12年9月

鹿島 晴雄